



Title	わかり合えないけれど：ヴェロニク・タジヨの『父から遠く離れて』を読む
Author(s)	村田，はるせ
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2021, 32, p. 22-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81405
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

わかり合えないけれど
ーヴェロニク・タジョの『父から遠く離れて』を読むー

村田はるせ

0. はじめに

本稿では 1980 年代から作家活動が続けているヴェロニク・タジョ (Véronique Tadjo :1955-) の 6 作目の小説『父から遠く離れて (*Loin de mon père*)』 (2010a) を取り上げる。タジョは第一作品である詩集『ラテライト (*Latérite*)』 (1984) 以来、複数の小説作品で、父の国であり自身が育ったコートジヴォワールを取り上げ、それにより同国だけでなくアフリカ諸国全般が抱える同時代の社会的、政治的問題をみつめてきた (Cordova & Kabwe-Segatti 2016 :13, Toivanen 2013 :103)。『父から遠く離れて』でも舞台はこの国の大都市アビジャンであり、2000 年代の同国の内戦中を描いている。

小説は、タジョと同様コートジヴォワール人の父とフランス人の母から生まれ、パリで暮らす主人公ニナが父の葬儀のために帰国する機内の場面から始まる。だが彼女は到着後、著名な知識人だった父によるニナや母に対する重大な裏切りを知り、愕然とする。作中では同時に、内戦が国民の生活を崩壊させているさまも語られる。このため作中の父娘関係は、ポストコロニアル国民国家の失敗のアレゴリーだと解釈する評者もいる (Toivanen 2013)。また混血であり、今ではヨーロッパに移民したニナが父方の家族や父の国と複雑な関係を結びながらアイデンティティを再考する姿に「今日の『アフリカ性』の複雑さ」 (Caporale 2016 :171) の表現を読み取る評者もいる。

しかしこの稿で同作から読み取るのは暴力の問題という主題である。というのもタジョは、ルワンダでのジェノサイドを取り上げ、2000 年に発表した『^{イマナ}神の影 : ルワンダの果てまでの旅 (*L'ombre d'Imana : voyages jusqu'au bout du Rwanda*)』¹⁾ (2000a) に、1990 年代に不安定化したコートジヴォワールへの懸念を書き込んでいるからだ。この時期同国では政治家間の政権争いが激化するなか、排外思想が宣伝され、暴力が国内に広がったのである。タジョは『^{イマナ}神の影』で、人が誰かを「他者」とみなし、恐怖

¹⁾ ルワンダのジェノサイドと『^{イマナ}神の影』については、村田(2018)を参照されたい。

や憎悪から排斥し、暴力を振るってしまった結果がどのようなものかを、当事者の証言の再構成や想像の物語を組み合わせながら書いている。そんなタジョはその後コートジヴォワールが内戦に陥ってから発表した『父から遠く離れて』では、人が人を理解することがいかに困難でも、暴力を止めるには他者を受け入れ、対話し、相手を知ろうとするしかないのではと問うていると考えられるのである。

本稿では、このように作品の主題をとらえて読み解く。そのため以下の1節ではタジョの経歴、『父から遠く離れて』のあらすじ、同作の舞台であるコートジヴォワールとその内戦について簡単に述べる。その後うえのように主題を捉えた理由を説明する。続く2節では作品を取り上げ、まず主人公のニナの父に対する思い違い、そしてニナ自身が周囲から理解されなかった体験がどのように書かれているかを読み取る。というのも本作にはまず、人は完全にわかり合うことなどできないという前提が描かれていると考えられるからである。作中では、父が複数の女性との間に子どもをもうけていたと知ったニナが遺品から記録や書籍を見つけ出し、記憶や想像と組み合わせて父の実像を知ろうとする。そのいっぽう彼女は、葬儀の進め方や異母弟妹の処遇に関して父方の親族と対立するうち、母がフランス人であるうえ、父の母語を理解できないために親族に疎外されてきたと気がつく。ここでは小説から、思い違いや思い込み、偏見の根の深さ、そして自身でそれに気がつくことの困難さを浮かび上がらせる。

そのうえでこの2節では、ニナが異母弟妹たちを受け入れ、それによってコートジヴォワールとの繋がりを意識していく過程を追う。そして父の不義の結果生まれた弟妹たちを、ニナはなぜ家族に迎え入れたのかを、彼女の独白や回想から考察する。そこにこそ、暴力をどう回避するかというタジョの問いの答えがあると思われるからである。

1. 作家と『父から遠く離れて』の枠組み

1.1 ヴェロニク・タジョという作家

ヴェロニク・タジョは1955年にコートジヴォワール人の父とフランス人の母のあいだにパリで生まれた²⁾。コートジヴォワールが1960年にフランスから独立する間際には、彼女は家族と同国南部沿岸の経済都市アビジャンに移り住んだ。父はこの新生国家の上級公務員となり、フランス人の母は画家・彫刻家として活動した。

²⁾ タジョの経歴や『父から遠く離れて』以前の作品の多くについては、村田(2010)で考察を行っている。

タジョはアビジャンでフランス語をほぼ唯一の母語として育ち、大学教育までを受けた。続いて留学したフランスではアメリカ黒人文化を研究し、1981年に博士論文を提出した。その後の二年間をコートジヴォワール北部の都市コロゴ(Korhogo)でリセの英語教師として過ごした彼女は、この体験をもとに詩集『ラテライト(*Latérite*)』を書きあげた。同作は1983年に文化技術協力機構賞(Prix littéraire de l'Agence de Coopération Culturelle et Technique (ACCT))を受賞し、タジョの作家への道を開いた。

続いてタジョはワシントンのハーワード大学で研究したのち、メキシコ、ケニア、ナイジェリア、イギリスなどで暮らし、アフリカの複数の大学で教鞭もとった。この間に上述の『^{イマーナ}神の影』など、彼女自身は「詩的散文」と呼ぶ小説4作品と、詩集『途上で(*A mi-chemin*)』(2000b)を発表した。また彼女は、1980年代末以降、西アフリカのフランス語公用語圏諸国での児童文学振興と出版発展にも貢献してきた³⁾。

2001年からは南アフリカで暮らしたタジョは、2007～15年にはヨハネスブルグにあるヴィットヴァターズランド大学でフランス語部門の責任者を務めた。2005年には5作目の小説『女王ポクー：ある犠牲のための協奏曲(*Reine Pokou : concerto pour un sacrifice*)』(2004)でブラックアフリカ文学大賞(Grand prix littéraire de l'Afrique noire)を受賞、アフリカ文学作家としての地位を確立した。6作目の小説『父から遠く離れて』を発表したのも南アフリカ在住中であった。2020年現在は、ロンドンとアビジャンの双方を拠点に作家活動を行っている。

1.2 物語のあらすじ

では『父から遠く離れて』を読み解くにあたり、物語を紹介しておきたい。本作は全189頁からなり、2部構成である。主人公の女性ニナが父の過去を探る第1部は19章からなる。続いて母やニナ自身の過去の回想が語られ、父の葬儀を締めくくる埋葬儀式が描かれる第2部は20章からなる。

パリで写真家として活動し、恋人と暮らすニナはコートジヴォワール人の父とフランス人の母を持つ。彼女が育ったコートジヴォワールで、父は著名な医学者、母は作曲家であった。物語は、高齢となり急死した父の葬儀のためにニナが帰国する場面から始まる。国はいまや内戦中で、母は内戦開始数年前に亡くなっていた。父の家で、大勢の親

³⁾ この点については、村田(2013)を参照されたい。

族が葬儀を準備するなか、ニナは父の遺品を整理し、父の過去を知っていく。父が複数の女性とのあいだに子どもをもうけていたことも判明する。父について、大きな思い違いをしていたと気づくニナだった。

そのいっぽうニナは、父方の親族の葬儀の進め方や価値観に反発を覚える。これによりニナは、この国で感じてきたわだかまりを思い出し、何年も前に国を出てしまった自分自身についても振り返る。すると作曲の仕事に没頭していた母、16歳で家出し、家族との交流を断ったままの姉にも思いが及ぶのである。ニナはまた、コートジヴォワールの将来が見えないなかで生きる市井の人々の姿にも接する。

数週間葬儀が続くなか、ニナは父が遺した4人の弟妹を家族に迎え入れ、彼らが逆にニナを支えてくれているのを感じるようになる。やがて父の埋葬が終わったとき、ニナは父の行動や嘘を理解できないものの、父を変わずに大切に思う自分を見出すのである。

1.3 コートジヴォワールとその内戦

『父から遠く離れて』の物語は以上のように、内戦中のコートジヴォワールで展開する。そこでこの内戦について、タジョのこれまでの作品との関りとも併せて簡潔にみておきたい。

コートジヴォワールには約60の民族が暮らす、その祖先は、植民地化以前にはすでにこの地に移入していたと考えられている(佐藤 2015 :48)。ここは19世紀末にはフランスの実効支配を受け、現在の領域がほぼ確定されると、1893年にはコートジヴォワール植民地としてフランス領西アフリカ(*Afrique occidentale française*)に組み込まれた(佐藤 2015 :54)。現在この国が世界の生産量を誇るココアは、1920年代から南部の熱帯森林で生産されはじめた。このための労働力として、現在のブルキナファソを含む内陸の周辺国から移民を受け入れ、独立後もそれは続いた。ココアは1960年に独立したこの国の経済成長を支え、アビジャンは「コートジヴォワールの奇跡」と謳われる大都市に発展した。

しかし1980年代以降のココアの国際価格暴落により、この国は経済危機に陥る(佐藤 2015 :152)。初代大統領となり、コートジヴォワール民主党(PDCI)による一党制を敷いたウフエ＝ボワニ(F. Houphouët-Boigny)の個人支配にはこのころから翳りが見えだしたのである。1990年からは、生活の悪化に抗議し、複数政党制導入を要求する学生組

織、人権団体、教員組合による示威行動が頻発した(佐藤 2015 :164-165)。タジョは2作めの小説『盲人の王国(*Le royaume aveugle*)』(1990)や3作めの小説『闘いの場 愛の場(*Champs de bataille et d'amour*)』(1999)で、この時期の閉塞感やそこで生きる個人の孤独を描いている。

1990年に複数政党制が導入されたものの、1993年にウフエ＝ボワニが死去すると、有力な政治家間の激しい政権争いが起き、コートジヴォワールは急速に不安定化した⁴⁾。その背景にあったのは、ウフエ＝ボワニの後継者を選ぶ大統領選をまえに、PDCI候補ベディエ(H. K. Bédié)が行った排外思想「イヴォワール人性(*ivoirité*)」⁵⁾の宣伝であった。これによって生じたのは、国民を序列化し、外国人を貶める言説の拡散であった。というのもベディエを支持した大学人たちは、ある個人をコートジヴォワール人と認めるには、「社会・歴史的、地理的、言語的な与件の総合」のほかに、「コートジヴォワールを祖地とし、コートジヴォワールの先住民族の一つに帰属するコートジヴォワール人を両親とすることが必要」(Niangoran-Bouah 1996 : 46)などと、あからさまに外国人や外国に出自のある国民を排除する主張を行ったからである。だがそれは、政敵のワタラ(A. Ouattara) (政党は共和連合(RDR))を大統領選から排除しようとしたベディエの戦略の一環であった。ワタラは、国内で周縁に置かれてきた北部地域と、そこに隣接するブルキナファソに出自上の縁が深く、支持基盤も北部にあったのである。

しかし多数の民族が暮らし、上述のように周辺国からの移民を長期に渡って多数受け入れてきたこの国では、この主張の影響は甚大であった。それは「コートジヴォワール人とは誰か」という激しい議論を引き起こすと、とくに北方の近隣諸国出身の移民や、そうした移民と文化・宗教をともにする北部地域出身者への差別と暴力を招き、拡大させていったのである。1999年11月には南部沿岸の都市タブー(Tabou)で、ブルキナファソからの入植者の村が近隣住民たちに焼き討ちされ、多数の死者が出る事件が起きた。こうしたなか翌12月には独立後初のクーデターが起き、ベディエは政権を追われた。

だが暴力は収まらなかった。2000年10月に民政移管のための大統領選挙が行われ

⁴⁾ これ以下、内戦終結までの記述では佐藤(2015 :18-27, 163-177, 204-205, 221, 226-235)とMcGovern(2011 :15-24)を参照した。

⁵⁾ フランス語でコートジヴォワール人(男性)は「イヴォワリアン(*ivoirien*)」となる。「*ivoirité*」は、この語と「…であること」を意味する接尾辞「*-té*」を組み合わせた造語で、字義的には「コートジヴォワール人であること」という意味を持つ。「イヴォワール人性」思想について、ベディエを取り巻く大学人が論じた資料としては(CURDIPHE 1996)がある。

ると、アビジャンでは特定の政治家の支持者間の衝突が起きた。この際には性的暴行や略奪などが発生したうえ、171 人が死亡した。とりわけアビジャンのヨプゴン地区では 57 人の射殺遺体が発見された。犠牲者はワタラの支持者とされて殺害されたとみられている。この事件は「ヨプゴンの死体の山」(Charnier de Yopougon)と呼ばれている。

こうしたなかタジョは 2004 年発表の小説『女王ポクー』で、ウフエ＝ボワニやベディエの出自民族バウレ(baoulé)の祖先ポクーの伝説を取り上げ、再解釈した。国内でよく知られるこの伝説は、バウレもまたガーナからの移入民だと明かす。そのような伝説をこの時期に取り上げることは、「イヴォワール人性」思想への強い反論ととることができるのである。なおこの伝説の主人公ポクーは、自身の民を救おうと息子を犠牲に差し出す。タジョはあるインタビューで、これを書いたのはコートジヴォワールとアフリカ全般で、若者たちが政治紛争の犠牲になっているからだと述べている(Tervonen 2005)。

さて 2000 年の選挙では大混乱のなかバボ(L. Gbagbo)政権が誕生したものの、同年 9 月には反乱軍がクーデターを起こして失敗、国はそのまま内戦に陥った。国土は政府が統治する南半分と、反乱軍が支配する北半分に分断され、北部から南部への避難民は 70 万人にのぼった。『父から遠く離れて』で描かれる避難民はこうした人々をさしている。

その後最終的な和平協定締結がなり、大統領選挙が実施されたのは 2010 年 10 月のことであった。しかしバボとワタラが争った第二回投票の結果を巡り、両陣営が対立、「選挙後の危機(crise postélectorale)」と呼ばれる武力衝突となった。3 千人以上が犠牲になったこの衝突を経て選挙の勝利者となったのは、フランス軍と国連の支援を受けたワタラであった。ワタラは 2011 年 4 月に大統領就任宣言を行った。

『父から遠く離れて』に描かれるのは、ちょうど和平を巡ってバボ政権と反乱軍が膠着状態にあった時期である。

1.4 暴力を止める

それでは『父から遠く離れて』の主題とはどのようなものだろうか。じつはタジョがルワンダのジェノサイド(1994 年勃発)を取り上げた小説『^{イマーナ}神の影』を発表したのは、上述の民政移管選挙があった 2000 年のことであった。同作の語り手は、タジョの分身のようなコートジヴォワール人女性である。彼女はルワンダで虐殺が起きた教会を訪れ、ルワンダの人々から話を聴いたあと、こう独白する。

そして今わたしは自分の国で、帰属するとかしないとかを耳にするのが怖い。分けること、ことさらに「外国人」を拵えあげること、排斥という観念をつくりだすこと。(…)人を暴力へと駆り立てる、「他者」に対する恐怖はどのように生じるのか。(Tadjo 2000a :49-50)

この作品は、ルワンダという枠組みを超え、他者への恐怖や憎しみから暴力に手を染めてしまう人間の性質そのものを見つめる。そのような作品でのこうした記述からは、ジェノサイドはどこでも起きうる、コートジヴォワールでも、というタジョの危機感を読み取ることができる。

タジョは、さきに『女王ポクー』についてみたように、現実の状況を読者に語りかけ、その現実がどのような方向に進んだらよいかと、みずから問うたことを作品に書いてきた。またフランスの『ルモンド』紙などにアフリカの政治状況に関するコメントや記事を寄せてきた。コートジヴォワールの「選挙後の危機」においては、バボとワタラの対話を呼びかける共同の公開書簡を発表している(Tadjo 2010b)⁶⁾。したがって、内戦に陥ったコートジヴォワールを舞台にした『父から遠く離れて』には、タジョがこの現実をどのように見ているかが読み取れると考えられるのである。そして筆者は、『^{イマナ}神の影』との関連からみれば、そこでは「暴力を止める」ということが大きな主題の一つであると推察している。つまり同作では、「人が人を理解できないと感じても、受け入れ、知ろうとして考え、対話することで暴力は止められるのでは」と問うているのではないかと考えるのである。というのもタジョは2008年のインタビューでこんなことを語っているからだ。もっとも身近な相手に対してでも、言いたいことを伝えるのは難しく、「思い違いや、口にしないで黙っていることがたくさんある。結局人は言いたいことを表現しきれず、向かい合っても孤独なのだ」(Maximin, Anyinefa & Tadjo 2008 :372)と。このことを念頭に『父から遠く離れて』を検討すると、そこにはまず「人は互いに

⁶⁾ なお本稿執筆中の2020年8月、上述のワタラは、憲法違反という野党の反対にもかかわらず三期めを目指して大統領選への立候補を表明した(投票日は10月31日)。タジョはコートジヴォワールだけでなくアフリカの様々な国の大統領が改憲をして大統領の座に居座り続ける姿勢を見せていることに強く抗議し、他のアフリカ人作家たちとともに「声明文：アフリカの終身大統領に反対する！」(Tadjo 2020)を発表した。だがワタラは、主要な野党がボイコットするなか、94パーセント以上を得票して再再選を果たした。

完全に理解し合うことなどできない」という前提と、理解できないこと、理解されないことの苦しみがかかれているのがわかる。そしてそのうえで同作は、「相手を受け入れることがあるなら、それはどのようにしてか」を描いているように読めるのである。

2. 『父から遠く離れて』を読む

では以下では、前節でみた主題を踏まえて、『父から遠く離れて』での理解しあうことの困難がどのように書かれているか、主人公ニナがそうしたなかで周囲と関係を結びなおす経過はどのように書かれているかを読み解く。

2.1 わかり合えないこと

2.1.1 理解することの困難：父の過去

この小説で主人公のニナが、理解することにもっとも困難を感じる相手は父である。作中では、大切に思ってきた父に対するニナの大きな思い違いが明らかになるのだ。

ニナの父クアジョ・ヤオは、独立直後の国づくりを担った世代に属し、口腔医学研究所所長にまで上り詰めた人物で、国内では尊敬を集めていた。努力家で、家にも仕事に没頭していた。子煩悩でもあり、週末には幼いニナと姉の遊び相手になり、映画に連れていってくれた。晩年父は内戦中の国に娘が戻るのを拒んだため、ニナは父急死の報をパリで受け取り、葬儀のために帰国した。すると父を看取ったところから、9歳の異母弟コフィの存在を知らされ、ニナは、「父という人について完全に思い違いをしてきたのか」(Tadjo 2010a:38)と自問することになる。こうしてニナによる父の過去の探求が始まる。手掛かりとするのは回想録執筆のために父が書いた手記、父が晩年に熟読した本、父の旅行記、両親の夫婦財産契約書といった記録である。

父の手記は、ニナが見つけた最初の記録である。そこには1930年にコートジヴォワール南東部で生まれ、5歳から植民地の学校教育の階梯を上った父の苦学が記されていた。向学心が強かった父は、両親が工面してくれた資金でフランス本国にも留学、バカロレア（大学入学資格）を取得すると、医学を修め、同時にフランス海外領国立学校というエリート養成機関でも学んだ。父はこの時代の植民地出身者としては最高の教育を受けていた。だがニナは、手記からは「何の感情も伝わってこない」(Tadjo 2010a:49)と思う。そこでは父が三人称で語られ、学業の成功ばかりが連ねられ、父も他の登場人物もイニシャルで示されるだけだったのだ。母エレヌとの学生結婚の記述はそっけな

く、ニナの姉で長女のガブリエルがパリで誕生した際については一言も触れていなかった。父は表向きの人生だけを語り、それ以外の事柄には沈黙していたのである。

いっぽうでニナは、晩年の父に関する思いもよらない情報を年上のいとこのニャムケから得る。彼は、父に貸していた多額の金を返すよう求めてきたのである。しかし借用書はなく、ニャムケは、目上の父に借用書への署名など求められなかったというばかりである。彼は父が借金をしたのは、期待していた保健大臣のポストを得られなかった直後だったこと、このとき父は失望からニャムケを前に涙を流したことも語った。威厳に満ちていた父を思うとき、これらはニナには信じがたい内容であった。

ニャムケと対談をしたころ、ニナは晩年の父の精神状態を裏書きするような書物を発見する。それは『呪術とその対処法』という本で、呪術から逃れる方法を指南していた。その内容は、夢や、「長期にわたり金銭的不安を抱えている」(Tadjo 2010a :66)といった生活上の懸念にまで他者からの呪いの痕跡を読み取る不気味なものであった⁷⁾。本の状態から、父がこれを繰り返し読んだことは明らかだった。留学し、フランス人と結婚して西洋的な価値観を身につけていたはずの父が呪いに怯えていたらしいと知り、ニナは驚く。そして父と自分は「何千キロという地理的な距離よりも、はるか遠くに隔てられていた」(Tadjo 2010a :69)と深い悲しみを感ずるのだった。

これに続く 1 部 9～10 章や 12 章では、父クアジョの過去を知ろうとしたニナが想像で父の人生を再構成しているように読める。そこではニナが知らないはずの人物とのクアジョのやり取りや、クアジョの独白が語られ、それぞれ父の晩年と両親の結婚の物語となっているのである。この中では父のガーナ旅行記と結婚時の夫婦財産契約書も引用される。ニナの想像はこれらに依拠するかのようである。

まず 9 章の物語のクアジョは年老いて、どうやらマラブー⁸⁾に金を騙し取られている。マラブーは、その金をある男に渡せば呪術で二倍に殖やしてくれると話すのだった。クアジョはそこそこ、未納だった税金の支払いを税務署から突然請求され、多額の現金を必要としていた。マラブーを薄々怪しいと感じ、「取り返しがつかなくなるまえに手を

⁷⁾ 作中の註によると、この箇所での記述は Uche Praise 編集の *Manuel d'école de prière. Vaincre les attaques des sorciers* (『祈りを学ぶ手引き 呪術師の攻撃に打ち勝つこと』) という実在する書籍の翻案だという。

⁸⁾ 西アフリカのフランス語公用語圏では、「マラブー」はイスラム教の知識の深さから尊敬を受けるイスラム教徒を指すいっぽう、占い師、呪術師、呪医の能力によって知られるイスラム教徒をも指す(Equip IFA, 1988)。ここでは後者が描かれている。

引こう。醜聞にまみれ、恥をさらすまえにそうするのだ」(Tadjo 2010a :73)と思うが、もはや氣力を失いそうなクアジョである。

続く 10 章では、クアジョは研究所を突然退職させられている。そこに研究所の部下が訪ねてきて、クアジョの失墜は「誰か強力な敵の仕業ですよ」(Tadjo 2010a :74)と邪推し、「悪い精霊を追い払ってくれるマラブー」(Tadjo 2010a :74)を紹介すると申し出る。最初はそれを受け流したクアジョだが、他にも不幸が重なったため、ガーナ旅行を決意する。物語に引用される旅行記によると、彼は自身の不幸の原因をガーナの有名な牧師に尋ねにいったのである。友人の息子が紹介してくれたこの牧師は、実際には占い師で、クアジョもそれを承知している。果たして牧師の答えは、研究所の同僚が嫉妬からクアジョに呪いをかけているというものであった。

ニナは父がこのような体験をしたと想像したようである。しかし二つの章は時間の流れ通りに出来事を語らず、出来事間の関係も明瞭ではない。たとえば、クアジョは旅行後にマラブーに会ったのか、それは 9 章のマラブーと同一人物なのか、ニャムケに借金したのは税の支払いのためだったのか、あるいは金をマラブーに渡したのか、といったことである。参照される旅行記も、クアジョがほんとうに呪いを信じたのかどうかは明確にしないのである。

いっぽう 12 章では、必ずしも円満ではなかった両親の馴れ初めが想像されている。それによると、クアジョと母エレーヌはパリの大学の食堂で出会い、すぐに関係を深めたが、エレーヌが妊娠するとクアジョは姿を隠す。彼には妻子を養う経済力はなかったからだ。白人女性を妊娠させた咎で強制送還されるのではと慄いてもいた。なにより故郷の親たちに顔向けできなくなるのを恐れていた。しかし絶望したエレーヌが妊娠中絶を試みて失敗すると、彼女の両親は二人を結婚させることにする。そして生まれたのがガブリエルであった。

物語には父母の結婚時の夫婦財産契約書が引用されている。そこにはエレーヌの両親が娘に与えた生活用品が、食器やタオルの数にいたるまで詳細に記されたうえ、その両親が最大 5 年間は新婚夫婦の住居費と生活費を負担すると記されていた。それはニナが、母方の祖父母の「寛大さ」とともに「このうえない尊大さ」(Tadjo 2010a :86)を感じとった書類である。娘夫婦への過大な支援には、一文無しのアフリカ人の婿には施しをせねばという人種差別的な内心が見え隠れしているのである。しかも離婚時の財産分離を想定して作成されたこの書類は、二人の早々の離婚を予告するかのようだ。ニナが

探した限りでは、これが両親の結婚の唯一の痕跡なのであった。これらのことから、両親の結婚があまり祝福されたものでなかったことは明らかである。12章ではこうして、結婚に対する両親の葛藤や、ガブリエルを見捨てようとしたという二人の後悔が想像されているのである。

ニナがこうして父の過去を探ると、彼女のなかの父の像は崩れていってしまった。信頼され、尊敬を受けていたその人は、弱く、多くの後悔を抱えた人間に見える。とはいえ父の過去の多くはニナの想像で、一貫した事実が明らかになったわけではない。ニナのアビジャンの家での見聞から読者が理解できることは、父の晩年の失墜や突然の税金徴収の原因は政変による政権交代だということである。旧政権を支持してきた父は地位や特権を奪われたのである。それなのに父は神秘的な力に助けを求めたのだろうか。もしそうならなぜなのか。父を知りたいと思ったニナだが、父の過去は親族の証言や複数の記録、書籍を突き合わせ、想像で補うことでようやく浮かび上がるだけで、それさえも確かなことはわからないのだ。小さな弟コフィについては、何一つ手掛かりはなく、父がなぜ母の死後もこの子のことをニナに秘密にしていたのかも不明なままである。事実を証明するかのような書類や書籍が引用されるのに、語られる両親の過去はひどく不透明だという小説内の表現は、人を理解することの困難を読者にいっそう強く印象付けるのである。

2.1.2 理解されないことの困難：ニナの疎外感

作中には理解することの困難とともに、理解されないことから生じる困難も書かれる。ニナは父方の親族と接するうち、コートジヴォワールでは理解されず、遠ざけられる経験をしてきたと思い出すのである。

そもそもこの国にわだかまりを持っていたニナは、成人するとそこを飛び出してしまっていた。ときどき帰国してはいたが、内戦勃発後の数年は足を踏み入れていなかった。作品冒頭の帰国便の機内で彼女は、父が亡くなったいま、この国にはもう自分の居場所はないという心細さと、そうなったのも「望んでほかの人々から遠ざかった」(Tadjo 2010a :15)自分のせいだという罪悪感の間で逡巡している。しかし父方の親族とのすれ違いを通して、ニナはこのわだかまりをいっそう意識していく。ニナと親族は葬儀会社で棺を買い、霊柩車を予約し、一見キリスト教式の葬儀を準備しているが、実際に親族

が整然と準備していくのは、アカン系諸語民族の伝統に則った葬儀である⁹⁾。葬儀の最後には、父の出身村で埋葬の儀式が盛大に行われるのである。だがそれまでに、ニナと親族、とりわけ父の姉妹であるおばたちに意見の対立が生じる。おばたちにとって当然の事柄でも、欧米文化のなかで暮らしてきたニナにはそうではないのだった。たとえば父の遺品の指輪を、ニナは身につけていたいと考えるが、しきたりでは指輪は故人とともに埋葬しなければいけないのだった。また父の出身地方の祭りの都合で埋葬が突然延期されると、ニナは相談もなく延期されたことに腹を立てる。しかしおばたちにすれば、伝統首長の決定には従うしかないのだった。

やがてニナは、異母弟妹を巡るおばたちとの話合いの場で、この国へのわだかまりが何であったかを思い知らされる。作中では父の子どもとして、9歳のコフィ、15歳のロラン、ニナより2歳年下で30代のアモンといった三人の弟と、ロランの姉で18歳のセシルが判明する。しかしおばたちはコフィ以外のすべての子どもの存在を知らず、母エレーヌ、姉ガブリエルとニナには長年沈黙していたのだった。これを知った瞬間ニナは、自分たちは親族から「のけ者にされて、周囲で起きたことから遠ざけられてきた」、「父は母語をニナに教えなかったから、そうするのは簡単だったことだろう」(Tadjo 2010a :122)と気づく。フランス人の母と母の娘たちは、父と親族の文化規範を知らない異物として受け入れられずにきたのである。彼女たちと親族は理解し合えず、分断されてきたのだ。ニナは、コートジヴォワールへのわだかまりはこうした事実起因していたと知っていくのである。

するとニナは記憶の中の、肌の色のせいで受けた体験の意味も理解していく。たとえば少女時代のニナと姉は、父の村を訪れるたびに子どもたちに「ボフエ」(Tadjo 2010a :126)と囃し立てられた。現地の言葉ではそれは「白人」を意味していた。またニナが遊び友だちと喧嘩したときにきまって投げつけられたのは、「だってニナは、ほんとうのアフリカ人じゃないからね」(Tadjo 2010a :126)という言葉であった。周囲と見かけが異なるニナは彼女を他者として扱い、さらには排除し、貶める言動に日常的に傷ついてきたのである。またニナは、自身の苦しみの原因を母のせいにして、母の「肌の色まで非難し」(Tadjo 2011 :136)たことも思い出す。そんな母はいつしか作曲の仕事に没頭し、仕事部屋に籠るようになってしまったのだ。

⁹⁾ Fort(2016 :79-80)には、この作品の葬儀に読み取れるコートジヴォワール南東部の文化や価値観が書かれている。

こうしてニナは、周囲に理解されなかった体験が自身の人生を規定してきたと振り返る。彼女はつねに人から出自を誰何されていると感じ、そのため「受け入れてほしい、存在を認めてほしい、招き入れてほしいとねだり、人の気持ちを逆なでしないように」(Tadjo 2010a :126)生きてきたというのである。パリの恋人と結婚に踏み切れずにきたのも、もはや「どこであろうとうまく生きられない」(Tadjo 2010a :112)気がしていたからなのだった。作中からはこのように、結局どこに行っても自分が誰かを説明させられたという体験の蓄積に苛まれるニナの姿が浮かび上がるのである。

ニナのこの苦悩には、混血という人種的マイノリティに向けられる、「ステレオタイプや偏見に基づく」く、「目に見えにくい、しかし受け手にダメージを与える」言動としての「マイクロアグレッション」(金 2016 :108)の影響を読み取ることができよう。「曖昧に行われる」(金 2016 : 118)のに、社会での支配的な価値観や見方への適応を自覚なく強制してくる言動に触れてきたニナは、そのたびに解釈に苦しんだり、反論できずに屈辱を味わったりし、やがて他者との関係構築に困難をきたすようになったと解釈できるのだ。理解されないことの困難は作中でこのように表現されるのである。

2.2 わかり合えないけれど

以上では、ニナが父を理解できない困難、ニナ自身が理解されないで生じる困難をみてきた。背景にあるのは、父の出身地の精神世界に対するニナの無知や、その世界と強いつながりを保持する父の内面に対するニナの無理解である。父や親族の側でも、みずからの文化をニナたちにあえて伝えず、ニナの理解を求めようとしなかった。ここにあるのは、ともに一つの国で暮らしてきたにもかかわらず、民族や出身地ごとに分断され、対立させられたコートジヴォワールの状況の象徴的表現ではないだろうか。父の親族の側はニナたち母娘を異質な存在として距離を置き、ニナたちのほうも心を閉ざしたり、国を出たりして距離をおいてしまったのだ。父はそのような親族とニナたちの橋渡しをしていたが、父の死後は双方の考え方の違いが浮き彫りになってしまったのだ。だが小説は、孤立させられたニナの混乱と苦悩を取り上げることで、「もしもっと早くに相手と対話していたなら」と読者に語りかける。そして、わかり合えない人間がそれでも他者を人生に組み込んでいくなら、それはどのようにしてなのかを問うていく。

その問いへの答えの一つとして読めるのは、父や親族たちが隠し続けてきた異母弟妹たちを家族に迎え入れるというニナの振る舞いである。ニナは帰国直後には「家族の記

憶を守るため、どこまでやれるだろう」(Tadjo 2010a :30)と心もとなく、孤独だった。しかし弟妹たちを受け入れた結果、ニナはコートジヴォワールの地に繋ぎとめられる。というのも癲癇の持病があるコフィや定職のないロランは一見ニナに経済的負担を強いる可能性のある存在だが、父が所有していた農地や貸家からの収入を計算し、二人への援助の算段を練るうち、ニナは「もしアビジャンに戻って暮らすことを選んだらどうなるだろう」(Tadjo 2010a :167)と、それまでは考えたこともなかったことを想像していくのである。さらには「とくに大事なのは、うまく行かないことがあっても、そればかりを気に病んでいてはいけないということだ」(Tadjo 2010a :167)と、この国で生きていくための心構えさえも見出そうとしていくのである。

また、語り部になるという夢を持ち、ニナに昔話を語ってみせる妹セシルはなかでも重要な役割を果たしていく。セシルが語ったのはこのような話である。

ある村で孤児となり、つらい子ども時代を送った兄弟が成長し、新たな土地で暮らすことにする。二人は旅に出て、蟻塚のある土地に辿りつく。蟻塚は吉兆である。ところが兄が土地を開墾しはじめると、弟はなぜか蟻塚のてっぺんに登り、降りてこなくなった。兄が手伝いをするよう言葉をかけても、弟は答えず、そのまま七年間飲まず食わずで蟻塚の上で過ごした。兄は一人で土地を拓き、家を準備したが、悲しく、弟が心配でたまらなかった。そこで意を決した兄が蟻塚の上に飛び上がり、弟を叩くと、弟はバランスを崩してどすんと地面に落ちてしまった。すると蟻塚が二つに割れ、不思議なことにその周囲の木々は立派な屋敷となり、動物たちは人間に変身し、村ができた。弟はやがて意識を取り戻すと、もとのように働き者で親切な若者となった。兄弟がともに村を治め、よく責任を果たしたので、村は豊かな王国となり、その誉ははるか遠くの国にも伝えられた。

セシルは語り終わると、「この結末を受け入れる覚悟はある？」(Tadjo 2010a :152)とニナに訊ねる。するとニナは大笑いして、「あなたはたいした語り手だわ、よくわかった」(Tadjo 2010a :152)と答えたのだった。これについて、『父から遠く離れて』を英訳したリードはこう解釈している。すなわちニナは父と親族の言語がわからない以上、「周囲で話されていることや起きている事実を的確に解釈できないことも、その結果生じることも諦めて受け入れなければならない。そして周囲との対話も受け入れなければならない。そうしたらやがて父の生涯や、より広くは共同体の文化規範をも理解できるだろう」(Reid 2016 :295)と。つまり昔話では、黙って蟻塚の上で過ごした弟は、ニナと親

族の間の意見や価値観の対立を象徴しているのである。そして物語は、思い切って対話をする用意がニナにあれば、互いが結ぶ関係は幸せをもたらすだろうと示唆しているのである。このようにとらえると、セシル自身は親族とニナの仲介役を申し出ているのがわかる。なぜなら彼女は、もとはコートジヴォワールの言語で語られた昔話を姉にわかるようフランス語に訳して伝えているからである。ニナが「よくわかった」と答えたのは、これらのメッセージを理解し、セシルの仲介を受け入れるという意味にとれるのである。

ニナはこうして、「新たな弟や妹はわたしがここで根を張れるようにしてくれ、この土地にしっかりと立たせてくれている」(Tadjo 2010a :170)と思うようになる。こんどは弟妹たちが親族とニナの橋渡し役になり、あらたな関係を結ばせてくれたのである。弟妹たちこそが「父が遺した財産なのか」(Tadjo 2010a :170)と感ずるようになったニナは、父とも和解しようとしているようである。父はニナや母を裏切ったが、ニナがコートジヴォワールに居場所を得るための道も開いてくれたのだ。父とはわかり合えていなかったと衝撃を受けたが、父は大切な人でもあると再確認するニナである。作品終盤、父の埋葬に立ち会ったニナが最後に発する言葉は、「お父さん、いつまでも愛しています」(Tadjo 2010a :189)というものである。

ではニナはなぜ弟妹を家族として受け入れたのだろうか。この件についておばたちは、クアジョの名声が汚される、問題が持ち込まれるなどと反対していたのだった。おばたちの言うとおりに、ニナは弟妹を無視することもできたのだ。ニナの姿勢は、葬儀に参列しないことで親族とは完全に価値観が異なると示そうとする姉ガブリエルとも異なる。姉は、異母弟妹について知らせるニナのメールに、「わたしには妹がたった一人いて、それはわたしが知っているニナです」(Tadjo 2010a :178)と答え、ニナだけを家族として認めると表明したのだった。このようなニナは姉のようにきっぱりと物事を割り切れず、町の情景や対話者を観察しては考え込む人物として作中に描かれる。たとえば弟コフィの存在を知ったニナは、いどこに付き添われ、民兵の活動やデモに怯えながらアビジャンを車で横断し、コフィに会いに行く。するとそこは、反乱軍に占領された北部からの避難民であふれ、貧しさが「言葉にできないほどの無秩序」(Tadjo 2010a :39)をなしている地区であった。「政治的に対立する陣営が頻繁に衝突」(Tadjo 2010a :38)するこの地区は、内戦の影響を直に受けていたのである。ニナはコフィのことをしばし忘れ、「自分の国なのに、いかに知らずにきたことか。守られた世界で暮らし、結局そこから

も逃げ出し、それでも自分ではたんに距離をおいただけだと思ってきたのだった」(Tadjo 2010a :49)と打ちのめされる。彼女はここでは、恵まれたエリート層という自身の立場に恥じ入り、この国への認識を揺さぶられているのである。あるいはニナは、カナダに移住して結婚した弟アモンから、成長してようやく本当の父親を知ったと打ち明けられると、ニナにはどうしようもないことだったのに「間接的にとはいえ、ニナとガブリエルはアモンにつらい思いをさせていた」(Tadjo 2010a :172)と申し訳ない気持ちでいっぱいになるのである。ニナはこのように、他者の現実を目を凝らし、それによって相手への見方や自身の行動を修正していく女性である。危険を冒してでもコフィに会おうとしたように、彼女にとっては相手を知るとはひじょうに重要である。

ところで小説には、未知のものでも知ろうとするニナの姿勢は父から教えられたと示唆する箇所がある。それは村での埋葬儀式の際、ニナが幼年時代の思い出に浸る場面である。記憶のなかの幼いニナは、村で夜を過ごし、すぐ近くの森から飛んできて室内の電灯に衝突する見なれない昆虫たちに怯えている。すると父は、「ニナ、何でもないとを怖がっていたら、幸せになんてなれないよ」と虫をつまんで窓の外に出してくれた。そして「ほらね、たいしたことじゃないだろう。虫たちは誰にも悪さをしないよ」(Tadjo 2010a :182)と言ってくれたのだった。父はこうして、人生において大切なことを娘に教えたのではないだろうか。他者を見かけで判断し、恐れて避けるより、相手をよりよく知ろうとするほうが「幸せ」になれるのだと。アビジャン到着直後のニナは、入浴時に「浴槽の内側に張りついた虫を一匹ずつ取り除く」(Tadjo 2010a :60)という幼いころの奇妙な癖を回想するが、そうやって虫たちを水から救ったのも、ニナが知らず知らずのうちに父の言葉を記憶にとどめていたからかもしれないのだ。ニナはそんな父の影響で、それまで存在も知らなかった弟妹たちを受け入れる決断をしたといえないだろうか。弟妹たちを知ることもしに別々の人生を歩んでいくことなどできないと思ったのではないだろうか。

作中ではこのように、理解し合えないかもしれないと思える相手を受け入れ、逆に自分がその相手に支えられるという循環が書かれている。わかり合えないとしても、それでも相手を人生に組み込んでいくためにはどうしたらいいのかという問いに対して、小説からはこのような答えが読み取れるのである。もちろんニナのように振る舞うのは簡単なことではない。タジョの『^{イマーナ}神の影』に戻るなら、ルワンダへの旅を終えた語り手は彼の地で「残酷で忌まわしい死をもたらした」(Tadjo 2000a :135)暴力の途方もなさ

を思い、こう言うのだ。「理解しなければ、憎悪の仕組みを、分断を引き起こす言葉を、裏切りを封印する言葉を」(Tadjo 2000a : 135)と。ここにあるのは、暴力に向かう者の内面で何が起きているか、まだ人類には何もわかっていないという認識の表明である。暴力の恐ろしさを幾度も見せつけられてきたのに、それを止める方法をわたしたちはいまだ知らないのである。だからこそタジョはこの『父から遠く離れて』で、「暴力を止めること」に向き合ったのであろう。そこでは、わかり合えなくても知ろうとする、という父の教え＝ニナの振る舞いがその方法として描き出されるのである。

3. おわりに

以上にコートジヴォワールの内戦を背景にした小説『父から遠く離れて』を読み解いてきた。同国では 1990 年代の政治家間の政権争いが国を不安定化させ、2000 年代に内戦を引き起こした。その過程では国民間の対立や外国人排斥が煽られた。本作に先立つ小説『^{イマーナ}神の影』で、コートジヴォワールの状況にジェノサイドの前兆を見る語り手の独白を記したタジョは、本作では人間の暴力をどのように止めるかという主題に向き合っている。そこでは、そもそも人間は本当には理解し合えないのだという前提のもと、それでも相手を人生に組み込み、関係を続けていくなればそれはどのようにしてかが問われている。

まずこの小説では、主人公ニナが父に対する大きな思い違いに気づくが、それは記録や実在の書籍の翻案、証言、想像などを通してようやく浮かび上がるものとして書かれている。さらには親族との文化的対立やニナの記憶などを通して、親族からの疎外、混血というマイノリティとしてニナが受けた差別、それが彼女の人生に与えた影響の大きさも描かれる。こうしたことはどれも、人間同士が理解し合うことがいかに困難かを語るものである。

しかし父が遺した異母弟たちは、ニナがわだかまりを持っていた父の国に彼女を根付かせてくれる。ニナは、おばたちを説得して弟妹を家族の中に迎え入れることで、かえって自身が弟妹に支えられていると気がつくのである。その過程では、妹セシルが語る伝承が、ニナにコートジヴォワールの親族との関係のつくりなおしを促すという重要な役割を果たす。ところが作中では同時に、他者を受け入れ、知ろうとすることの重要性を幼いニナに教えたのはじつは父であったかもしれないとも示唆される。ニナはだからこそ、父の死後になって現れた弟妹たちを無視することなく、受け入れたのかもしれない

いのである。ニナは父の行動や妻娘たちへの嘘の理由を理解できたわけではない。親族たちの価値観や葬儀の方法を巡る意見に納得しているわけでもない。わかり合えないままであることに変わりはないのである。しかし周囲の人々を受け入れ、関係を続けることでニナは孤立を脱し、弟妹や親族との相互的に支え合う関係に入ろうとしている。

『父から遠く離れて』はこうして、たとえわかり合えないとしても偏見なく知ろうとし、対話するなら、それによって紡がれる関係により、人の暴力を止めることはできるのではないかと語りかけるのである。

参考文献

金友子. 2016. 「マイクロアグレッション概念の射程」『生存学研究センター報告』24, 105-123.

佐藤章. 2015. 『ココア共和国の近代：コートジボワールの結社史と統合的革命』アジア経済研究所.

村田はるせ. 2010. 「アフリカで作家であるということ：ベルナール・ダディエ(Bernard Dadié)とヴェロニック・タジョー(Véronique Tadjo)から読む西アフリカのフランス語文学」(東京外国語大学提出博士学位論文).

_____ 2013. 「アフリカの子どもための文学：サハラ以南アフリカのフランス語で書かれた児童文学とヴェロニック・タジョ」『スワヒリ&アフリカ研究』24, 121-140.

_____ 2018 「文学としてジェノサイドを書く」『アフリカ研究』94, 73-83.

Caporale, Maria. 2016. “Language and Discourse in the Narrative of the Postcolonial Self in *Loin de mon père*,” *Ecrire, traduire, peindre Véronique Tadjo*, 157-172, Présence Africaine.

Cordova, Sarah Davies & Désiré Kabwe-Segatti. 2016. “Introduction,” *Ecrire, traduire, peindre Véronique Tadjo*, 11-20, Présence Africaine.

CURDIPHE. 1996. “L’Ivoirité ou l’esprit du nouveau contrat social du Président Henri Konan Bédié (Actes du forum CURDIPHE du 20 au 23 mars 1996),” *Ethics*, 1.

- Equipe IFA. 1988. *Inventaire des particularités lexicales du français en Afrique noire*. Paris, EDICEF / AUPELF.
- Fort, Pierre-Louis. 2016. “Les secrets du deuil dans *Loin de mon père*,” *Ecrire, traduire, peindre Véronique Tadjó*, 77-87, Présence Africaine.
- Maximin, Micheline Rice, Koffi Anyinefa & Véronique Tadjó. 2008. “Entretien avec Véronique Tadjó,” *The French Review*, 82(2), 368-382.
- McGovern, Mike. 2011. *Making War in Côte d'Ivoire*. London, Hurst & Company.
- Niangoran-Bouah, Georges. 1996. “Les fondements socio-culturels de l'ivoirité,” *Ethics*, 1, 45-51.
- Reid, Amy Baram. 2016. “When the Storyteller Speaks: The Significance of Opacity in *Loin de mon père*,” *Ecrire, traduire, peindre Véronique Tadjó*, 285-299, Présence Africaine.
- Tadjó, Véronique. 1984. *Latérite*. Paris, Hatier.
- _____ 1990. *Le royaume aveugle*. Paris, L'Harmattan.
- _____ 1999. *Champs de bataille et d'amour*. Paris, Présence Africaine.
- _____ 2000a. *L'Ombre d'Imana: voyages jusqu'au bout du Rwanda*. Paris, Actes Sud. (ヴェロニク・タジヨ 2019『^{イマナ}神の影 ルワンダへの旅—記憶・証言・物語』村田はるせ訳, エディションエフ.)
- _____ 2000b. *A mi-chemin*. Paris, L'Harmattan.
- _____ 2004. *Reine Pokou :concerto pour un sacrifice*. Arles, Actes Sud.
- _____ 2010a. *Loin de mon père*. Paris, Actes Sud.
- _____ 2010b. “Makhily Gassama et Véronique Tadjó sur la crise ivoirienne (Lettre Ouverte),” *Ouestaf News*, 30 Mars 2011.
<https://www.connectionivoirienne.net/2011/03/30/makhily-gassama-et-veronique-tadjo-sur-la-crise-ivoirienne-lettre-ouverte/> (2020 年 10 月 26 日確認)
- _____ 2020. “Manifeste: Halte à la présidence à vie en Afrique! ,” *Change.org*.
<https://www.change.org/p/soci%C3%A9t%C3%A9-civile-en-afrique-et-institutions-internationales-manifeste-halte-%C3%A0-la-pr%C3%A9sidence-%C3%A0-vie-en-afrique-f05516e8-5ea2-4666-b9afc52b90614649> (2020 年 10 月 31 日確認)

Tervonen, Taina. 2005. ““Le mythe est sorti trop tôt de sa cachette,” entretien avec Véronique Tadjo,” *Africultures*, 23/05/2005.

<http://africultures.com/le-mythe-est-sorti-trop-tot-de-sa-cachette-3842/> (2020 年 10 月 27 日確認)

Toivanen, Anna-Leena. 2013. “Daddy’s Girls ? : Father-Daughter Relations and the Failures of the Postcolonial Nation-State in Chimamanda Ngozi Adichie’s *Purple Hibiscus* and Véronique Tadjo’s *Loin de mon père*,” *A Review of International English Literature*, 44, 99-126.